

管理栄養士養成課程卒業生の大学生活と就業動向

著者	久保田 のぞみ, 高野 良子, 黒河 あおい
雑誌名	地域と住民：コミュニティーケア教育研究センター年報
巻号	1 35
ページ	1-12
発行年	2017-05-31
出版者	名寄市立大学
ISSN	0288-4917
書誌レコードID	AN0001106X
論文ID (NAID)	120006342834
URL	http://id.nii.ac.jp/1088/00001677/



研究報告

管理栄養士養成課程卒業生の大学生生活と就業動向

久保田のぞみ*、高野良子、黒河あおい

名寄市立大学保健福祉学部栄養学科

キーワード：卒業生、管理栄養士養成課程、就業動向

1. はじめに

管理栄養士制度が検討されていた1960年代ころの栄養士養成施設卒業生は、資格を得ても多くは栄養士として就職しない、しても短期間で退職して家庭に入るものが多く、その要因には短期大学養成施設の増加と教育の質、有資格者としての質と職業意識の希薄さがあった¹⁾。1980年度新卒者の栄養士職就職状況においても、専門学校68.4%、短大で3割程度、4年生大学では18.5%、そして栄養士より複雑困難な業務にあたるために創設された管理栄養士養成課程にあっても38.5%(539人)であった(全国栄養士養成施設協会調べ)。2000年以降、管理栄養士養成施設が増加し、近年の卒業生は毎年1万人前後となり、2015年度新卒者の栄養士職就職率は60.7%(6,089人)となった。医療、福祉などの制度改正等を背景に、栄養士職の需要が拡大しており、栄養士養成施設卒業生の栄養士職への就職率は高くなっている。その一方で、受託給食会社では3年未満の離職率が高いといわれ²⁾、また栄養士職以外の職(以下、他職種という)に就く卒業生も4割程度存在する。

2006年に開学した名寄市立大学における栄養学科卒業生は、2017年3月に総数317名となった。ほとんどの卒業生は就職しており、なかでも栄養士職は平均70~80%³⁾と全国平均と比較して高い傾向にある。1、2期生は職場において中堅となる時期でもあり、今後名寄市立大学卒業生の社会的役割が大きくなっていく状況にある。一方、他職種に就いた卒業生では、大学で学んだことが社会生活にどのように作用しているだろうか。

栄養士養成施設卒業生の就業状況については、短期大学卒業後の栄養士職にある者を対象とした業務内容⁴⁾、就業状況⁵⁾、新人の業務遂行に対する思い⁶⁾などの研究がある。4年制大学の管理栄養士養成施設卒業生を対象とした研究は、他学部を含めたなかで初職転職理由を検討したもの⁷⁾がある程度である。卒業生アンケートを行っている大学はいくつもある⁸⁾が、全学部学科の総体的な分析であり、管理栄養士養成課程卒業生の状況分析は詳細とはいえない。

そこで、本研究は、管理栄養士養成課程教育のあり方の検討資料にすることを目的に、卒業生の大学生生活の様子と就業動向を見ていく。

ここで本論文における用語の意味を次のように限定する。転職は、所属機関を退職後、別の機関に所属することを意味する。例えば学校栄養士のように、非正規雇用の契約期間終了後、正規雇用となって同じ職場に配属された場合も転職に含む。期限付き非正規雇用が更新されて同じ職場に勤務した場合は、転職には含まない。異動は、所属機関はそのまま、配属先や職種に変更がある場合を意味する。例えば、受託給食会社に所属し、派遣先の給食施設が変わった場合や雇用条件が非正規から正規に変わった場合を異動とする。

*責任著者 E-mail:nkubota@nayoro.ac.jp

2. 調査の概要と回答者の属性

1) 調査の概要および倫理的配慮

調査対象は栄養学科を2010年3月から2015年3月に卒業した236名(1~6期生)とした。名寄市立大学同窓会の協力を得えて、所在不明の15名をのぞいた221名に、2015年8月、自記式調査用紙を郵送した。

調査項目は、大学入学および卒業時の状況(入学の動機、大学生活、卒業時から調査時までの就業状況および業務内容など)、大学教育・生活に関する事項(社会生活に役立っていること、大学教育の充実が必要だと感じる内容、大学時代の人間関係と卒後の状況など)、キャリアアップに関する事項(卒業後に得た資格、進学など)とした。

本研究は名寄市立大学倫理委員会の承認を得たうえで実施した。調査に際して、対象者に依頼文書をとおして調査目的・方法、調査内容および回収した調査票の取り扱い、プライバシー保護、辞退の自由、公表に際する対応に関して書面をもって説明し、調査票の提出をもって同意したものとした。

2) 回答者の基本属性

2015年9月までに回収された調査票は54、回収率は24.4%であった。回答者の属性は、2009年度卒業(1期生)9名、2010年度卒業(2期生)12名、2011年度卒業(3期生)6名、2012年度卒業(4期生)11名、2013年度卒業(5期生)6名、2014年度卒業(6期生)10名、男性2名、女性47名、性別無記入5名、平均年齢は25.2歳(22~28歳)であった。

調査時の有職者は51名であり、このうち栄養士職41名、事務職や販売職などの他職種9名、自営1名であった。無職者は4名であり、このうち就職経験のない者は1名であった。

3. 入学動機および大学生活の様子

1) 入学動機

はじめに、名寄市立大学栄養学科に入学した動機をみてる(表1)。もっとも多かったのは、「栄養士・管理栄養士免許がほしかった」43名(79.6%)、「栄養学に関心があった」35名(64.8%)であり、54名中52名がどちらかまたは両方を回答していた。「栄養士・管理栄養士免許以外の免許がほしかったが入学した」という項目も設けたが選択した者はいなかった。このことから回答者の中には不本意入学はなかったものとする。次いで多かったのは「授業料が安いなど経済的な理由」31名(57.4%)であった。およそ2割が高校教員や親のすすめがあったこと、栄養教諭免許状の取得が動機となったと回答した。「その他」5名の内容は、「北海道に行きたかった」、「大学パンフレット表紙のひまわり畑が魅力的だった」、「地元だったため」、「道内の大学でないと進学の許可が下りなかったから」、「国公立大学にこだわりがあった」であった。

表1 入学動機

	人数	%
栄養士・管理栄養士免許がほしかった	43	79.6
栄養学に関心があった	35	64.8
授業料が安いなど経済的な理由	31	57.4
高校教員や親のすすめ	12	22.2
栄養教諭免許がほしかった	11	20.4
有意義な学生生活が送れると考えた	7	13.0
栄養士・管理栄養士免許以外の免許がほしかったが入学した	0	0.0
その他	5	9.3

注) 回答者数54名、複数回答。

2) 大学生活

卒業生たちは大学時代をどのように過ごしていただろうか。教育内容、学生生活支援、自己学習やサークルなどの活動について、満足であったかまたはよく取り組んだか、それらの経験が社会生活に役立っていると思うかをたずねた。それぞれ満足度、役立ち度、取り組み度として、回答が「満足していた、役立っている、取り組んだ」を5、「どちらかといえば満足していた・役立っている・取り組んだ」を4、「どちらともいえない」を3、「どちらかといえば満足していなかった・役立ってない・取り組まなかった」を2、「満足していなかった、役立ってない、取り組まなかった」を1として合計し、回答者数で除した。

(1) 教育内容

教育内容は科目分類ごとに満足度と役立ち度は表2のとおりである。満足度が高かったのは卒業研究4.2、専門教育科目4.0であった。その反面、「満足しなかった」科目を具体的にあげた者は、専門科目1名、一般教育科目5名、連携科目⁹⁾2名、卒業研究2名であった。専門科目については「知識の詰め込みが多く、学問としての面白みを見出すことができなかつた」ということであった。一般教育科目では「英語やスポーツ実技などをやる必要性を感じなかつた」者と「高校在学時の内容よりやりがいがなかつた」者がいて、科目に対する期待の違いがみられた。連携科目は、「連携科目がウリなのに授業数が少なかつた。1~4年通してやるとか議論をする項目が欲しなかつた。専門的視点から考えることがしなかつた」、「臨地実習などで履修した内容が役立つたと感じにくかつた。他学科の学生とともに症例を検証するなど、実用的な学習をしなかつた(カンファレンス模擬)」と、実践の内容を期待していたようすがうかがえた。卒業研究では、「担当教員の変更で研究内容が変わってしまった」、「あまり指導、助言等をしてもらえなかつた」ことがあげられた。

社会生活での役立ち度が高かったのは専門科目4.3で、在学中の満足度より高い結果となった。一般教育科目、連携科目、卒業研究は、満足度に比べて役立ち度が低かつた。

表2 教育内容

	在学中の満足度		社会生活での役立ち度	
専門教育科目	n=54	4.0	n=51	4.3
一般教育科目	n=54	3.7	n=51	3.5
連携科目	n=54	3.7	n=51	3.6
卒業研究	n=54	4.2	n=50	3.8

(2) 学生生活支援

学生生活支援に対する満足度は、「実験・実習施設の充実」3.9、「国家試験受験に対する支援」3.8、「情報処理関係施設や機器の充実」3.7が高めであつた(表3)。

満足ではなかつたとして具体的な内容があげられたのは、「図書館の施設や蔵書の充実」と「就職活動に対する支援」が多かつた(表4)。図書館に関しては蔵書の種類や量の不足と図書館利用の不便さが、就職活動では情報の不足や個別対応の不十分さに加え、遠方での活動に対する費用負担があげられた。「国家試験受験に対する支援」では、国家試験対策体制不十分であつた初期と、その反省から模擬試験回数を増やした時期の両方ともに不満があつたことが明らかになつた。

表3 学生生活支援に対する満足度

	満足度
実験・実習施設の充実	3.9
国家試験受験に対する支援	3.8
情報処理関係施設や機器の充実	3.7
学生の交流スペースの充実	3.6
就職活動に対する支援	3.6
奨学金制度など経済的な支援*	3.6
学生生活におけるさまざまな悩みの解決支援	3.6
図書館の施設や蔵書の充実	3.4

注) 回答者54名、*は53名。満足度の算出は表3に同じ。

表4 学生生活支援において満足ではなかった項目と理由

	人数	割合(%)	理由
図書館の施設や蔵書の充実	10	18.5	・専門分野の本、その他学生時代存分に読書に親しむためには施設の規模、種類、冊数すべて不足していると感じていた ・必要な図書はあまりなく、使用したい時は人気がある本が集中し、借りられないこともあった ・図書館が狭く、蔵書も古かった ・図書館が2か所にわかれていたこと ・土日が閉館であったこと
就職活動に対する支援	5	9.3	・道外の就職情報、支援があまりなかった ・個人的指導が少なかった ・就職希望先の情報（地域での評判など）をもっと知りたかった ・就職活動の交通費負担が大きすぎる。支援制度があればよいと思う
国家試験受験に対する支援	3	5.6	・大学としての国家試験対策の体制が確立していなかった ・国試の前の卒業式 ・国家試験対策の模擬試験の回数が多く、復習が追いつかなかったこと
学生の交流スペースの充実	2	3.7	・他学科と交流できるスペースが少なかったように感じていた
情報処理関係施設や機器の充実	2	3.7	・パソコンの台数が不足していたと思います ・レポート提出時期になるとコンピュータ室に学生がたくさんいて使えなくなることがあった
実験・実習施設の充実	1	1.9	・もっと実習したかった
奨学金制度など経済的な支援	1	1.9	・授業料の減免制度
学生生活におけるさまざまな悩みの解決支援	0	0.0	

注) 割合は各項目の回答者数(表3参照)で除した値。

3) 大学生活に関する活動

自己の学習、サークル活動、就職活動などの取り組み度と役立ち度について、在学中の取り組み度が高かった項目から順に並べたのが表5である。在学中にもっとも取り組んだのは「アルバイト」4.3、ついで「専門的な知識の習得」3.9、「交友関係を広げること」と「就職活動」は3.8であった。大学生活における活動の特徴は、どの項目も在学中の取り組み度より社会生活での役立ち度のポイントが高くなっている点である。

表5 大学生活に関する活動

	在学中の取り組み度		社会生活での役立ち度	
アルバイト	n=54	4.3	n=53	4.8
専門的な知識の習得	n=53	3.9	n=52	4.4
交友関係を広げること	n=54	3.8	n=52	4.3
就職活動	n=54	3.8	n=53	3.9
幅広い教養の習得	n=54	3.7	n=52	4.0
サークル活動	n=54	3.2	n=51	3.5
地域での活動	n=54	2.8	n=51	3.6
ボランティア活動	n=54	2.6	n=52	3.3

4. 就業動向

つぎに就職動向を整理する。回答者54名のうち卒業後に就職した者は51名であり、就職外とした3名は自営1名、未就職1名、無回答1名であった。ここでは就職者51名のうち雇用条件が未記入であった1名を除いた50名を分析対象とする。

50名の初職と調査時の就業状況は、表6のとおり、栄養士職はどちらも41名と8割を占めた。対象者らの卒業時平均就職率は93%、うち栄養士職割合は70~80%であることから、回答者の分布は、栄養士職がやや多いものの、卒後直後の就職状況と大きなずれはないと考えられる。

表6 初職と調査時の就業状況

	初職		調査時	
	人数	%	人数	%
栄養士職	41	82.0	41 (21)	82.0
正規雇用	31	62.0	37 (20)	74.0
非正規雇用	10	20.0	4 (1)	8.0
他職種	9	18.0	6 (5)	12.0
正規雇用	8	16.0	5 (5)	10.0
非正規雇用	1	2.0	1 (0)	2.0
退職	—	—	3 (0)	6.0
計	50	100.0	50 (26)	100.0

注) 調査時 () は初職継続者数の再掲。

1) 初職の状況

50名の初職は栄養士職41名(82.0%)、他職種9名(18.0%)であり、雇用条件は正規雇用39名(78.0%)、非正規雇用11名(22.0%)であった。

表7は初職の仕事はじめの研修・引き継ぎの状況、指導者、仕事の相談をした人を整理したものである。全員がなにかしらの研修・引き継ぎを受けていたなかで、非正規雇用の場合は同職種の先輩の指導が多い傾向がみられた。

仕事の指導者は、上司、職場の先輩が多く、他職種では割合が高いが、栄養士職は低めであった。指導者の「その他」の内容をみると、栄養士職では事務

職員や調理員であったり、事務的な仕事に関する指導者はいても「栄養士としての職務について具体的に指導してくれる人はいない」状況であった。学校給食では都道府県教育委員会職員の指導などがあったというが、日常的な指導ではなかった。

仕事に関する相談者は、上司、先輩、指導係など組織関係者のほかに、栄養士職の場合では大学の友達、「その他」では職場での同期、調理員や事務員など他職種の同僚、大学の教員、家族、地元のともだちなど多様であった。相談できる相手が「いなかった」と回答した者が6名いた。

仕事に関する研修会などへの出席状況では、職種に関わりなく組織主催の会に参加しやすい状況がうかがえた。「仕事のために参加できなかった」と回答した者が栄養士職で4名、他職種で1名いた。栄養士職3名の「その他」は、保健所主催の研修会、研修会はないなどであった。

2) 初職継続者の状況

調査時に継続して初職に就業していた者は、栄養士職41名中新卒6名を含む21名(51.2%)、他職種では9名中新卒2名を含む5名(55.6%)であった(表8)。栄養士職には医療機関と学校給食を含め公務職が7名おり、他職種と合わせると公務職は11名(42.3%)いた。平均在籍期間は栄養士職26.6か月、他職種24.2か月であった。

表7 初職の環境

	栄養士職				他職種			
	正規雇用 n=31		非正規雇用 n=10		正規雇用 n=8		非正規雇用 n=1	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
研修・引き継ぎ								
新人研修	19	61.3	0	0.0	6	75.0	0	0.0
前任者との引き継ぎ	22	71.0	2	20.0	5	62.5	0	0.0
上司の指導	12	38.7	4	40.0	5	62.5	0	0.0
同職種の先輩の指導	12	38.7	6	60.0	3	37.5	1	100.0
指導者								
上司	14	45.2	3	30.0	7	87.5	0	0.0
職場のベテランの先輩	16	51.6	2	20.0	5	62.5	0	0.0
職場の年齢が近い先輩	14	45.2	7	70.0	3	37.5	0	0.0
組織の指導係	3	9.7	8	80.0	2	25.0	0	0.0
その他	3	9.7	2	20.0	0	0.0	1	100.0
相談者								
上司	6	19.4	3	30.0	6	75.0	0	0.0
職場のベテランの先輩	9	29.0	2	20.0	3	37.5	0	0.0
職場の年齢が近い先輩	12	38.7	3	30.0	4	50.0	0	0.0
組織の指導係	2	6.5	0	0.0	1	12.5	0	0.0
大学の先輩	2	6.5	0	0.0	0	0.0	0	0.0
大学の友達	12	38.7	2	20.0	0	0.0	0	0.0
いなかった	2	6.5	3	30.0	0	0.0	1	100.0
その他	9	29.0	3	30.0	1	12.5	0	0.0
研修会など								
組織主催の研修会・勉強会	21	67.7	8	80.0	5	62.5	1	100.0
栄養士会などの研修会	14	45.2	3	30.0	0	0.0	0	0.0
必要ななかった	0	0.0	0	0.0	1	12.5	0	0.0
仕事のために参加できなかった	3	9.7	1	10.0	1	12.5	0	0.0
その他	3	9.7	0	0.0	0	0.0	0	0.0
無回答	0	0.0	0	0.0	1	12.5	0	0.0

注) 複数回答。

表8 初職継続者の状況

栄養士職 n=21	医療機関	5名 (1名)
	福祉施設	5名 (0名)
	受託給食会社	5名 (3名)
	学校給食	4名 (0名)
	行政	1名 (1名)
	その他	1名 (1名)
	平均在籍期間	26.6か月
	他職種 n=5	公務職
	民間企業	1名 (0名)
	平均在籍期間	24.2か月

注) () は2014年度卒業生数再掲。

3) 転職者の状況

転職経験者は24名おり、転職率は48.0%、ほぼ半数が転職していた。そのうち転職1回経験者は20名、転職2回経験者は4名であった。

転職1回経験者の状況を整理したのが表9である。栄養士職間の転職者が15名、栄養士職から他職種が1名、他職種から栄養士職が3名、他職種間が1名であった。雇用条件に注目してみると、栄養士職では、非正規雇用から正規雇用への6名が異動していた一方、正規雇用から非正規雇用への異動も2名いた。初職を退職した理由、つまり転職した経緯は、希望する職種・仕事内容・地域の仕事をあげている者が多いことから、前向きな転職と考えられる。また結婚が転職と重なった者が3名いた。平均在籍期間は初職18.0か月、転職先21.7か月であった。

転職を2回経験した者4名は全員が栄養士職経験者であった(表10)。退職理由は初職、2度目の就業とも労働条件、家庭の事情がおもな理由であった。雇用条件に一定の傾向はみられないが、2度目の就業では4名ともに非正規雇用ではあるものの、平均在籍期間が30.5か月と、初職10.3か月を大きく上回った。

表9 転職1回経験者の状況

ケース	初職	2度目の就業	退職理由
栄養士職から栄養士職 n=15			
正規雇用から正規雇用			
1	医療機関	⇒ 医療機関	希望する仕事内容の職場が見つかった
2	社会福祉施設	⇒ 市町村	希望する地域で仕事が見つかった、家族の事情
3	学校	⇒ 学校	希望する職種の仕事が見つかった
4	受託給食会社	⇒ 医療機関	希望する地域で仕事が見つかった
5		⇒ 医療機関	無回答
6		⇒ 市町村	希望する地域・仕事内容の職場が見つかった
非正規雇用から正規雇用			
7	医療機関	⇒ 医療機関	希望する職種の仕事が見つかった
8		⇒ 医療機関	希望する仕事内容の職場が見つかった、 仕事の内容が合わなかった、仕事で能力を發揮できなかった
9	学校	⇒ 学校	希望する職種の仕事が見つかった、契約期間終了
10		⇒ 学校	契約期間終了、その他
11		⇒ 学校	無回答
12	受託給食会社	⇒ 社会福祉施設	直営希望
正規雇用から非正規雇用			
13	社会福祉施設	⇒ 医療機関	希望する仕事内容・職種・希望する給料の仕事が見つかった
14	不明	⇒ 不明	仕事の内容が合わなかった、仕事で能力を發揮できなかった
非正規雇用から非正規雇用			
15	医療機関	⇒ 医療機関	契約期間終了
栄養士職から他職種 n=1			
正規雇用から非正規雇用			
16	社会福祉施設	⇒ 福祉	仕事の内容が合わなかった、仕事での能力不足を感じた、職場の人間関係、結婚のため
他職種から栄養士職 n=3			
正規雇用から正規雇用			
17	福祉職	⇒ 社会福祉施設	希望する職種の仕事が見つかった
18	調理職	⇒ 医療機関	希望する地域で仕事が見つかった、結婚のため
非正規雇用から正規雇用			
19	福祉職	⇒ 医療機関	希望する職種の仕事が見つかった、給料が低すぎた
他職種から他職種 n=1			
正規雇用から非正規雇用			
20	サービス業	⇒ サービス業	結婚・出産・育児のため
		平均在籍期間	初職 18.0か月 転職先 21.7か月

表10 転職2回経験者の就業状況

ケース	初 職		2度目の就業		3度目の就業
	就業状況	退職理由	就業状況	退職理由	就業状況
21	栄養士職 正規雇用 医療機関	結婚のため	栄養士職 非正規雇用 医療機関	家族の事情	栄養士職 正規雇用 医療機関
22	栄養士職 正規雇用 医療機関	仕事での能力不足を感じた 仕事で評価されなかった	栄養士職 非正規雇用 受託給食会社	給料が低すぎた	栄養士職 非正規雇用 その他
23	栄養士職 非正規雇用 学校	契約期間終了	栄養士職 非正規雇用 学校	正採用が決まったため	栄養士職 正規雇用 学校
24	栄養士職 非正規雇用 受託給食	給料が低すぎた	他職種 非正規雇用 社会福祉施設	給料が低すぎた	栄養士職 正規雇用 社会福祉施設
平均在籍期間		初職10.3か月	2度目 30.5か月	3度目 7.3か月	

4) 現在の仕事

つぎに調査時に就業していた47名の現在の仕事のよいと思うことを整理した(表11)。全体的には「やりがいを感じる」53.2%、「仕事を通してスキルアップしたい」48.9%が上位にあげられた。栄養士職初職継続者では「人間関係がよい」53.3%、栄養士職転職経験者では「やりがいを感じる」65.0%が他の割合に比べて高かった。新卒者は就業して間もないことも影響してか、一定の傾向はみられなかった。「その他」には、「子ども達にいやされる」、「安定」、「やりたいと思っていた事を始められた」、「勉強する場が多く設けられている」ことであり、反面よいと思うことは「特になし」、あるいは「人手不足により仕事の充実感が感じられない」という回答があげられた。

現在の仕事をいつまで続けようと考えているかをたずねた(表12)。全体的には「できるだけ長く続けたい」40.4%、「とくに考えてことはない」21.3%と6割の者が継続意思を持っていた。栄養士職でみると、転職経験者は「できるだけ長く続けたい」(60.0%)と考えている一方で、初職経験者の26.7%は「次の仕事が見つかるまで」と転職を希望している傾向がみられた。「その他」には、結婚を機に退職を予定している者、理由は不明であったが「半年」で辞めたいと考えている者、「考えることはあるが、とくにやめようとは思わない」、現在の職種で働きたいが「仕事場所(居住地)は地元に戻りたい」、新卒者では「3年経ったらやめることを考える」者がいた。

表11 現在の仕事のよいと思うこと—調査時の就業者—

	計 n=47	栄養士職 n=41						他職種 n=6						
		初職継続 n=15		転職 n=20		新卒 n=6		初職継続 n=3		転職 n=1		新卒 n=2		
		人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	
やりがいを感じる	25	53.2	8	53.3	13	65.0	1	16.7	1	33.3	1	100.0	1	50.0
仕事を通してスキルアップしたい	23	48.9	8	53.3	11	55.0	2	33.3	2	66.6	0	0.0	1	50.0
人間関係が良い	18	38.3	8	53.3	7	35.0	1	16.7	1	33.3	0	0.0	1	50.0
知識や技術を生かすことができる	18	38.3	6	40.0	10	50.0	2	33.3	0	0.0	0	0.0	0	0.0
組織に貢献したい	11	23.4	3	20.0	6	30.0	1	16.7	0	0.0	1	100.0	0	0.0
給料がよい	8	17.0	3	20.0	4	20.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	50.0
仕事や組織に将来性がある	8	17.0	2	13.3	6	30.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
仕事内容があっている	5	10.6	1	6.7	3	15.0	0	0.0	1	33.3	0	0.0	0	0.0
その他	6	12.8	1	6.7	2	10.0	2	33.3	1	33.3	0	0.0	0	0.0
無回答	1	2.1	0	0.0	0	0.0	1	16.7	0	0.0	0	0.0	0	0.0

注)複数回答。

表12 現在の仕事の継続

	計 n=47		栄養士職 n=41						他職種 n=6					
			初職継続 n=15		転職 n=20		新卒 n=6		初職継続 n=3		転職 n=1		新卒 n=2	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
できるだけ長く続けたい	19	40.4	4	26.7	12	60.0	1	16.7	1	33.3	0	0.0	1	50.0
とくに考えたことはない	10	21.3	3	20.0	3	15.0	2	33.3	0	0.0	1	100.0	1	50.0
次の仕事が見つかるまで	5	10.6	4	26.7	0	0.0	1	16.7	0	0.0	0	0.0	0	0.0
できるだけ早くやめたい	3	6.4	2	13.3	1	5.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
その他	5	10.6	1	6.7	2	10.0	1	16.7	1	33.3	0	0.0	0	0.0
無回答	5	10.6	1	6.7	2	10.0	1	16.7	1	33.3	0	0.0	0	0.0

注) 調査時。

5) 退職者

調査時の退職者3名の前職は2名が栄養士職、1名は他職種であり、退職理由は、「給料が低すぎた」、「出産・育児のため」、「家族の事情」であった。2名は栄養士職での再就職を希望しており、1名は時期をみて考えとの回答であった。なお退職者3名のうち転職1回経験者1名、2回経験者が2名であった。

5. 今後のキャリア

1) 仕事をするうえで重視すること

仕事を継続するにしても転職するにしても、仕事から得られることは働く者にとって重要である。回答者54名の仕事をするうえで重視することを点数化し重視度を出したところ、「職場の雰囲気が良いこと」4.6、「自分のやりたい仕事であること」4.5、「長期間安定して働けること」4.4の重視度が高かった。

表13 仕事をするうえで重視すること

	重視度
職場の雰囲気がよいこと	4.6
自分のやりたい仕事であること	4.5
長期間安定して働けること	4.4
自分の個性や能力が生かせること	4.2
資格を生かせること	4.2
働く組織に将来性があること	4.1
給料が高いこと	4.0
人や社会の役に立つこと	4.0
自分のやりたいこと(趣味など)と両立できること	3.9
家庭生活(育児など)と両立できること	3.9
休みが多いこと	3.8
仕事を通して資格や技術が身につけられること	3.8
地理的条件がよいこと	3.6

注) 重視度は「重視する」5、「どちらかといえば重視する」4、「どちらともいえない」3、「どちらかといえば重視しない」2、「重視しない」1として点数化し、回答者数54で除した。

2) 自己研鑽

卒後に取得した免許・資格は、調理師2名、日本糖尿病療養指導士、登録販売者、健康医療コーディネーターがそれぞれ1名であり、放送大学等へ進学して教員免許に必要な単位を取得した者1名、修士課程に在籍している者が1名いた。

今後取得したい免許・資格は、日本糖尿病療養指導士11名、臨床栄養師6名、管理栄養士5名、ケアマネージャー5名、公認スポーツ栄養士4名、健康運動指導士3名、栄養教諭を含む教員免許状3名のほか、野菜ソムリエ、調理師、食生活指導士、食学士、保育士、危険物乙種四種、健康食品管理士、調理師、NST

専門療法士、医療事務、薬関係の資格などがあげられた。

キャリアアップのために実施していることの自由記述に 12 名が回答した。内容は、資格取得の受験勉強中、大学院在学中、専門誌の定期購読、栄養士会など研修会や勉強会、関係学会への参加などであった。

進学は「考えたことはない」35 名 (64.8%) が多かったが、大学院進学が在籍中の 1 名を含む 5 名 (9.3%)、専門学校進学 3 名 (5.6%)、大学編入 1 名 (1.9%) の希望があった。

6. 大学への満足度、要望・意見

卒後の社会生活をふまえて、名寄市立大学栄養学科で大学生活を送ったことをどのように感じているかをたずねてみた。表 14 にみるように「満足している」30 名 (55.5%)、「どちらかといえば満足している」17 名 (31.5%) であり、その理由は「大学生活が楽しかった」(43 名、91.5%) であった。また「その他」5 名すべてが、大学生活での友人、知人、教員との出会いをあげた。「どちらともいえない」、「どちらかといえば満足していない」、「満足していない」と回答した卒業生は合わせて 7 名 (13.0%) であった。理由の半数近くは「大学生活が楽しくなかった」(3 名、42.9%) であったが、「学んだことが役立っていない」や「もっと専門的な知識を身に付けたかった」、「どちらともいえない」というなかには「その他」として「楽しく過ごせたとし、学ぶこともできたが、都心に近い方がより最先端の情報を得られたようにも思う」との記述があった。

大学生活で得られた友人・知人との卒後の関係は、「頻繁に連絡をしあう友人・知人がいる」28 名 (51.8%)、「ときどき連絡をしあう友人・知人がいる」23 名 (42.5%)、「最近は連絡しあうことがなくなった」1 名 (1.9%) であり、「連絡しあう関係の人はいなかった」と無回答がそれぞれ 1 名 (1.9%) であった。

大学および栄養学科に支援を得たいと思うことに回答した者は 42 名であり、「離職したときの再就職支援」22 名 (52.4%)、「大学施設の利用(図書館など)」14 名 (33.3%)、「現在の悩みに関する相談対応」13 名 (31.0%) であった。

表 14 名寄市立大学栄養学科で大学生活を送ったこと

	理 由	人数	%
満足している 30名 (55.6%)	大学生活が楽しかった	43	79.6
	仕事をするうえで役立っている	34	63.0
	社会生活に役立っている	26	48.1
	家庭生活に役立っている	18	33.3
どちらかといえば満足している 17名 (31.5%)	その他	5	9.3
どちらともいえない 4名 (7.4%)	大学生活が楽しくなかった	3	5.6
	学んだことが役立っていない	2	3.7
どちらかといえば満足していない 2名 (3.7%)	もっと専門的な知識を身に付けたかった	1	1.9
	大学生活が楽しくなかった	1	1.9
満足していない 1名 (1.9%)	その他	1	1.9
	無回答	1	1.9

注) 回答者数54名、理由は複数回答。

表 15 今後名寄市立大学および栄養学科の支援を得たいと思うこと

	人数	%
離職したときの再就職支援	22	40.7
大学施設の利用(図書館など)	14	25.9
現在の悩みに関する相談対応	13	24.1
学位取得・大学院進学や留学などに関する支援	8	14.8
生涯学習のための支援	8	14.8
免許・資格	6	11.1
その他	2	3.7
無回答	13	24.1

注) 複数回答。割合は回答者42で除した値。

名寄市立大学および栄養学科また管理栄養士養成に対する意見について自由記述を求めたところ、18名(33.3%)から学生時代の自らの経験と社会に出てから実感したことなどをふまえた内容が寄せられた。内容ごとにまとめたものが表15である。

授業・実習では開講時期に触れている者が多かった。名寄市立大学の特徴的である連携教育については、職場で役立っているという者と実際の職場を想定した授業の工夫を求める者がいた。

キャリア教育・支援では、就職活動における経済的支援および準備に関することがあげられた。食品衛生管理者、食品衛生監視員任用資格は6期生まで取得できなかった¹⁰⁾が、食品会社勤務の卒業生は、これら

表16 名寄市立大学および栄養学科また管理栄養士養成への意見

【授業・実習】

- ・3年、4年で学ぶことが多すぎたように感じています。現在は違うかもしれませんが、もう少しカリキュラムを分散させ、余裕をもって取り組めたらよかったと思っています。
- ・実習期間に不満があった。4年時に就職活動と実習と重なり、うまく就活ができないという友人を多数見かけた。
- ・実習は4年生のときではなく3年生の時におもに行った方が良かったと思った。4年生で卒論、就活、国試勉強、栄養教諭免許試験等があったととても忙しかった。
- ・実習がいろんなところでできてよかったです。
- ・臨床栄養に関する教育が大学では少なかったので充実されると嬉しいです。
- ・管理栄養士として個別に行う食事調査や栄養教育に関して、学生同士で行うだけではなく、対象者や使う資料などを実際の場面を想定して近づけたほうが就職後スムーズに仕事を行えるのではないかと感じています。
- ・栄養士として働きた際、同年代の栄養士しかおらず職場に教えてくれる上司がいなかったため、給食管理の基礎的なこともわからずに苦勞することが多かった。給食経営や献立作成に関しては、もっと深く授業で取り入れてもよいのかなと思います。
- ・非常勤講師の先生の授業と臨床栄養学臨地実習での経験が私の人生を拓いてくれたとも言えます。在学生にもこの様なチャンスがあると良いと思います。
- ・管理栄養士として働く上で、看護師、ケアマネージャー、生活相談員、社会福祉士との連携はとても大切だと思っています。現在行っているケアプランの作成、利用者支援は、食事のみでなく利用者様の生活にアプローチする必要があり、多職種と関わらないことには成り立ちません。大学時代に受けた連携教育はとても大切だったと日々感じています。
- ・仕事を始めてから連携科目でやり切れなかった部分がとても必要と感じた。看護師とのやりとりはたくさんあるのでその議論、環境づくり、人間関係の作り方等を密にできる授業があるとよかったです。

【キャリア教育・支援】

- ・社会に出た時に敬語、マナーなど必要な事を身につける機会があればよいと思います。
- ・大学の先輩をまねき、交流があるとよかったです。仕事の話が聞けるとうれしい。
- ・ある時期まで食品衛生管理者任用資格等が取得できなかったと思います。できるのであれば、卒業生でも単位を取得し、資格をとられるような制度があればと思います。もしあるとするならば、周知などお願いしたいです。
- ・食品衛生監視員資格が得られない時期で残念でした。資格があれば就職活動の幅が広がったと思います。
- ・地理的な問題から就活に時間も費用も掛かるため、何か大学から支援があると同時期に行う卒業研究や実習などに集中できると思います。
- ・就活の際は就職支援室の方が熱心に指導をしてくれたので、これからも続けてほしいと思います。
- ・実際に働いていると求人票の情報と違う部分も多かったので就職活動の支援を行う際に職場の状況をもう少し把握できればよいと思います(事前に職場見学など)。
- ・直営でも施設によって仕事内容に違いがあり、栄養士業務以外の仕事もあります。事前に知ることで選択も変わってくる方もいると思います。
- ・大学院があるとよいと思います。

【学生生活支援】

- ・1年時は教養科目が多く、栄養学に関する専門科目が少なかったため、何を勉強しに来たのか忘れかけた時期があった。自分から学ぶ姿勢があれば図書館利用や教授への質問等で学べたが、高校の延長のように感じ勉強がすまなかった。1年時から未来を見すえられる支援があるとよかったと思う。
- ・学ぶ機会はたくさん与えられていたので、早いうちから、就職や国試をみすえていけば良かったと思っています。
- ・学食のメニューの充実をした方がよいと思う。もっとおいしくしてほしい。

【その他】

- ・自然も多く、良い環境で学生生活を送れたと思う。
- ・よりよい大学になってください。応援しています。
- ・在学中は大変お世話になりました。名寄市立大学の今後のご発展を願っております。
- ・お陰様で自分のやりたい仕事ができます。名寄市立大学の専門性と幅広い教養教育は現在も役立っています。
- ・名寄市立大学、名寄市、北海道で出会い、お世話になった方々には心から感謝しています。初めて親元を離れ、就職前の貴重な4年間の中で、「やりたい」と思うことを存分に伸ばし、温かく支援し、また環境を作ってくださいました。在学中の4年間は一日一日がとても充実していて、「名寄だからできること」「自分たちで考え、やりたいことを見つけだし、実現していくこと」に溢れていたと感じます。他大学に在学していた友人と当時話しをしていても、これほど学生に親身になって支援して下さる大学、地域は私がかきく中では他にありませんでした。また、卒業後も北海道であった友人や先生、知人と繋がっていることも、社会人生活を送る上でも支えになっています。これからますます名寄市立大学が発展し、いつまでも当初の学生の「やりたい」を支え、環境を整備して下さる大学であり続けることを願っています。
- ・名寄市立大学で取得させていただいた資格と免許、教えていただいたこと、体験したことを最大限活用して仕事をしております。大学化を進めてくださった先輩方に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

注) 文意を損なわない程度に文章を整えた。

の資格があれば仕事の範囲が広がる可能性があると考えている。

学生生活に関しては、入学時期にモチベーションを高める支援、低学年より国家試験や就職活動に向けた準備の支援があるとよいという意見があげられた。

7. 考察および課題

回収率が低く、栄養学科卒業生全体の状況を把握するには至らなかったが、栄養士職の就業動向において、転職状況ならびに受託給食会社に入社した卒業生の状況が明らかになった。

栄養学科卒業生の初職における転職率は、栄養士職で高く、次の就業先が希望する職種、地域、仕事内容であったためというのが理由であった。井島らは、管理栄養士養成課程を含むある女子大学の卒業生初職転職調査から、栄養士や保育士など「専門職につながる資格を持っている者は、公的機関に就職すると転職はあまりないが、民間企業や団体への就職は離職する傾向」があり、学部を問わず転職は「ステップアップを行うための上昇志向的な要素も見られた」¹¹⁾と述べており、栄養学科卒業生も同様の傾向にあった。しかし転職2回経験者には、家族の事情により転職を余儀なくされたと思われる卒業生がいた。卒業生の9割は女性であり、結婚、出産をきっかけにこうしたケースの増加が予測される。また転職2回経験者では、仕事が評価されない、給料がよくないといった労働条件が理由であり、1回転職経験者とは異なる点が見受けられた。

初職が受託給食会社であった卒業生54名中10名であった。このうち初職継続は5名ですべて正規雇用であり、新卒者3名を除く2名の在籍期間は53か月と29か月であった。転職した者5名の受託給食会社の在籍期間は長い方で38か月、1名は明確ではないが18か月程度、2名は12か月、1名は7か月であった。3年を超えた1名は非正規雇用で一度異動も経験していた。受託給食会社への定着率は低く、転職は比較的早くに行われていることが確認できた。転職した者はそれぞれ直営の正規雇用となり、その仕事を「できるだけ長く続けたい」、「仕事をとおして組織に貢献したい」と前向きな姿勢がみられた。

現在の就業継続について「3年経ったらやめることを考える」とした新卒栄養士職がいた。「つぎの仕事が見つかるまで」、「できるだけ早くやめた」と回答した者には初職継続者が多い傾向がみられた。山田らは新人看護師の就業について「仕事内容への不満」等はあるが現在は離職を考えていないものが存在する、「1年目にやめても実践経験が積めないため、就業を継続することを希望していた」¹²⁾というように、栄養士職においても転職希望をもちながら、希望に近い就職先が見つかるまでは現在の職場で能力を高めておこうとするようすがうかがえた。受託給食会社や社会福祉施設の初職継続者にも転職希望者はいるものの、転職を考えながらも辞めずに働く背景には、「人間関係がよい」ことが推察された。

最後に管理栄養士養成課程卒業生の就業動向における今後の課題を2つあげる。1つは、調査の継続についてである。未回答者のなかには、仕事は順調で困っていることはないから回答は不用と考えた卒業生もいれば、多忙で回答する余裕がなかった、就業状況が酷くて回答する気持ちになれなかった卒業生もいたと推測される。深刻な状況の把握こそ重要であり、喫緊の課題である。また、今回の調査では卒業直後の職場の受け入れ態勢などに重点を置いたが、労働条件・時間、業務内容などの把握も必要と考える。加えて一人でも多くの対象者に協力してもらえ体制を整えなければならない。

2つめは、他職種に就く者への対応である。他職種に就いた卒業生も入学時には「栄養士免許がほしかった」「栄養学に興味があった」と回答しており、希望変更の時期やきっかけの把握が必要である。とはいえ、今後もある程度の学生が他職種就職を希望することが想定される。栄養学科は管理栄養士養成のためのカリキュラムであり、専門性を高める授業内容ではあるが、広い分野で活躍する卒業生を視野に入れた教育であることが求められる。これは他職種のみならず、地域住民を対象とする栄養士職をめざす学生にとっても実践的能力を養うことにつながると考える。

謝辞

多忙な中調査にご協力くださいました名寄市立大学保健福祉学部栄養学科卒業生の皆さま、調査にご賛同いただき調査票配布の労をとってくださった名寄市立大学同窓会の皆さまに心より感謝申し上げます。

なお本研究は平成27年度名寄市立大学特別枠支援を受けて実施した。

注)

- 1) 鈴木道子「管理栄養士—養成システムの二重構造」橋本鉦市編著『専門職養成の日本的構造』玉川大学出版部、2009年、165-183
- 2) 佐藤愛華「フードサービス—給食サービスを中心に」「からだの科学 (増刊) これからの管理栄養士」2008年、77
- 3) 名寄市立大学「大学案内」2010～2015年度による。
- 4) 藤本さつき、池内真澄、上地加容子、佐藤泉、島村知歩、花戸愛子、山下まゆ美、矢和多多姫子「食物栄養専攻卒業生の実態調査から栄養士教育を考える」『奈良佐保短期大学紀要』、第14号、2006年、55-61
- 5) 久保田のぞみ「栄養士の就業実態・意識調査からみる養成施設の課題」『名寄市立大学道北地域研究所 地域と住民』第28号、2010年、65-74
- 6) 池端千恵子、古屋美知、森岡美帆「新人栄養士の業務遂行の思いに関する質的研究」『日本健康教育学会誌』第23巻、第2号、2015年、134-142
- 7) 井島由香、西村純一「女子大学卒業生の初職転職理由に関する研究：A女子大学卒業生を中心に」『東京家政大学研究紀要』第54集(1)、2014年、63-71
- 8) お茶の水女子大学リーダーシップ養成教育研究センター「お茶の水女子大学卒業生のライフコース—卒業生アンケート調査に基づいて—」(2010年)、武庫川女子大学・武庫川女子大学短期大学部自己評価委員会「武庫川女子・武庫川女子短期大学部卒業生アンケート調査結果報告書」(2011年3月)、神戸大学院「神戸大学院卒業生アンケート集計結果報告書」(2013年3月)、川崎医療福祉大学FD・SD委員会「平成27年度学部卒業生アンケート報告書」などが公開されている。
- 9) 名寄市立大学保健福祉学部には栄養学科のほか、看護師・保健師を養成する看護学科、社会福祉士および特別支援学校教員などを養成する社会福祉学科がある(2016年3月現在)。卒後、職場および地域において各々の専門性を発揮するためには他職種と連携が不可欠であることから、名寄市立大学では開学時より「保健・医療・福祉の各領域が連携する意義・効果や連携対象専門職の職能などを学ぶとともに、ある特定のフィールドにおいて、連携・協働を試み、専門職連携の実践や課題解決のあり方を体験する科目」(名寄市立大学「2012年度大学案内」)として3学科の3年次に「保健医療福祉連携論」「フィールドグループワーク」を同時開講している。なお2016年度入学生からは開講科目の増やし、1年次から履修させるカリキュラムとした。
- 10) 食品衛生管理者、食品衛生監視員任用資格は2012年度入学生(2016年3月卒業、7期生)から取得可能となった。
- 11) 前掲7) 67
- 12) 山田典子、横川亜希子、村松真澄、三上智子、内田雅子「大卒看護職の初期キャリアにおける就業満足感と離職願望」『札幌市立大学研究論文集』第8巻第1号、2014、24